

この本おすすめ～

# 「こども文学館 えほんのひろば」

お話会のみなさん + 仙台文学館



(公財)仙台市市民文化事業団  
仙台文学館



## はじめに

仙台文学館では、開館翌年の二〇〇〇年から、親子で本の世界を楽しんでいただこうと、夏休み期間に「こども文学館えほんのひろば」を開催してきました。

会期中には、県内のお話会の団体の方々に、絵本の読み聞かせ、素ばなし、紙芝居、影絵、手あそび、人形劇など、子どもたちのために心をくだいた内容のお話会をしていただきました。当館の「こども文学館えほんのひろば」は、こうした方々のご協力をいただき、今日に至っています。

この度発行したこの『この本おすすめ〜「こども文学館えほんのひろば」お話会のみなさん+仙台文学館』は、「こども文学館えほんのひろば」を支えて下さっている方々に教えていただいた、おすすめ本をご紹介します。また、展示やゼミナールでお世話になった、子どもの本に長年向き合っておられる、清水真砂子さん、とよたかずひこさん、宮川健郎さんに、文章を寄せていただきました。ご存じの本、初めて出会う本、さまざまでしょう。今回、ここにご紹介できた本は、ほんの一部に過ぎません。ぜひ「こども文学館えほんのひろば」、またお近くの本屋さんや図書館にお出かけになり、みなさんにとって大切な一冊を探してみてください。

本誌が、みなさんと本をつなぐきっかけとなることを願っています。



文学館の庭

# 目次

はじめに.....	1
テーマⅠ 一緒に楽しむおすすめ本.....	3
仕事としての絵本創り「とよたかずひこ」.....	10
こどものほんのみせポラン.....	14
テーマⅡ 疲れた時のおすすめ本.....	15
「聞くことのロップ」が満ちるまで「宮川健郎」.....	20
絵本と木のおもちゃ 横田や.....	24
テーマⅢ いつか読んで欲しい本・手渡したい本.....	25
あなたがあなたになるために「清水真砂子」.....	30
職員おすすめ本.....	34
仙台文学館案内.....	37
仙台市内の図書館案内.....	39

出版年は初版の年を、改版されたものは改版の年を記載しています。  
本誌は、絵本、児童書、漫画、詩画集、紙芝居など様々な本をテーマごとに紹介しています。現在絶版のものも含まれていますが、市内図書館等で所蔵しています。

## テーマⅠ 一緒に楽しむおすすめ本





『ぐるんぱのようちえん』  
文 西内ミナミ 絵 堀内誠一  
福音館書店 1998年

ぐるんぱはいつもひとりぼっちで暮らして、「さみしいな」と涙をながしていましたが、ある時ぐるんぱが子ども達と出会い幼稚園を開くというお話です。子ども達と出会う前にぐるんぱが作る物にも注目してほしいです。(宮城学院女子大学 おもちゃ箱サークル)



『14ひきのあさごはん』  
文・絵 いわむらかずお  
童心社 1983年

「ぼくらはみんなで14ひきかぞく」で始まるおなじみの絵本。風を感じ、光を感じ、四季の実りを感じ、そして14匹それぞれの生き生きとした個性を感じます。ページを開く度、新しい発見があり、家族皆が大好きな本です。(仙台むかし話の会)

『そらはだかんぼ!』



『そら はだかんぼ!』  
文・絵 五味太郎  
偕成社 2008年

読み聞かせ一年生だった昨年の冬、会場にいた子どもから初めて「アンコール!」をもらった本です。わかりやすい絵と読みやすい文章は、子どもにとっても楽しい時間となることを実感しました。(IMSやまねこ屋)



『さるのせんせいへびのかんごふさん』  
文 穂高順也 絵 荒井良二  
ビリケン出版 1999年

大人も子どもも、とにかく笑えます。へびの看護婦さんの有能なこと! さるのお医者さんも優しく、とんでもないハプニングにも動じません。病院が少し苦手な子も行ってみたくするような愉快なお話です。(とびだす絵本)



『そりあそび』  
文・絵 さとうわきこ  
福音館書店 1994年

何をするにも豪快なばばあちゃん。ハデに遊んでベッドをこわしてしまう。でも頭をひねった、ばばあちゃん、ベッドの足にスキーをとりつけ、ベッドのそりを作る。またまた豪快なそりあそび、もうサイコー! ごんなおばあさんになりたいです。(仙台カナキンくらぶ)



『あかいはっぱのおくりもの』  
文 西本鶏介 絵 いもようこ  
教育画劇 1988年

丘の上に立つ一本の木に一枚の赤い葉っぱがゆれていった。赤い葉っぱは枯れそうになりながら、親鳥と卵を温め、雛の誕生を見守ります。最後まで輝きながら散ってゆく赤い葉は、生きる喜びと疲れた心を癒してくれます。(おはなしの森)

愛嬌のある動物が真正面を向き赤ちゃんとしっかり向きあい、視線を引きつけページをめくると「ばあ」。ページをめくるワクワク感、驚きを見事に表現して、赤ちゃんから読める絵本です。もう一回とアンコールの多い絵本です。(語り手たちの会・みやぎ)



『いないいないばあ』  
文 松谷みよ子 絵 瀬川康男  
童心社 1981年

赤ちゃんにとって、絵本の内容より一緒に本を見る楽しさを感じてもらうことが大事です。大好きな人の膝に座って、その人の声で、その人の心も添えて読んでもらうことで絆も深まるでしょう。(みやぎ親子読書をすすめる会 わらべうた)



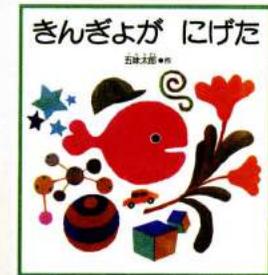
『いねかりやすみ』  
文・絵 菊池日出夫  
福音館書店 1987年

昭和24年生まれの子がえがく、長野県佐久地方の農家の子どもたちの日常。昭和の子ども生き生きとした外遊び、生活を作者のヒデくんや犬のラッキーがつづけて行く。いねかりの作業がていねいにえがかれ、わかりやすい。(山台カナキンくらぶ)



『おはようからおやすみまでの12のわらべうたえほん』  
編 小林衛己子 絵 おおいじゅんこ  
ハッピーオウル社 2006年

わらべうたは、ただのうたではありません。遠い昔から、たくさんのお母や祖母たちが、わが子や孫を育てる上で培ってきた育児の知恵そのものです。育児の助っ人と言えるでしょう。様々な場面に応じて楽しんでみましょう。(みやぎ親子読書をすすめる会 わらべうた)



『きんぎょがにげた』  
文・絵 五味太郎  
福音館書店 1982年

赤ちゃんが最初に出会う「ファーストブック」の一冊としてお薦めです。金魚鉢から逃げ出した「きんぎょ」。「どこかな?」と、一緒に指差しながら絵本の世界に入り込める、楽しい本です。(読み聞かせボランティア どんぐりころこ)



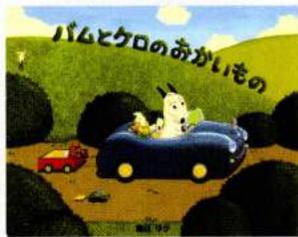
『ネコのタクシー』  
文 南部和也 絵 さとうあや  
福音館書店 2001年

走るのが得意な猫のトムは、ある日猫専用の小さなタクシーを始めます。迷子の老猫を家に送ったり、けがをした猫を病院に運んだりして、猫ばかりでなく飼い主や町の人たちにも感謝されるようになります。心温まる本当に楽しいお話です。  
(とんぼの会)



『花咲き山ものがたり』  
文 斎藤隆介 絵 滝平二郎  
理論社 1986年

お父さん、お母さんがお子さん(幼稚園児、低中学年)と一緒に楽しめる本として。やさしさ、勇気、命の尊さ、仲間を思いやる気持にあふれ、そしておもしろい。花咲き山、ソメコとオニ、天の笛等、読み聞かせて頂きたい本。  
(おはなし泉の森)



『バムとケロのおかいもの』  
文・絵 島田ゆか  
文溪堂 1999年

子育て中に夫もはまった一冊。何度読んでも細部に新しい発見や疑問がわいてきて、何回も楽しめるところがお得♡とのこと。子どもが家にいない今も、たまに開いては、「ここで娘がギャハハと笑った」と、実は一生楽しめる我が家の愛蔵本。  
(ちいさいにんぎょうげき まるべと)

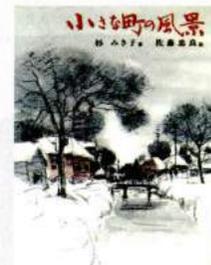


『はじめてのこうさくあそび』  
文 ノニノコ  
のら書店 2005年

テレビやゲームもいけれど、子どもと楽しいものづくりをしましょう。えをかく・プリントする・かみでつくる・おもちゃをつくる・へやをかざる・ぬのでつくるから構成。一緒にみて一緒につくって一緒にあそべる楽しい本です。  
(仙台むかし話の会)

『のぼらの村のものがたり』全8巻  
春のピクニック/小川のほとりで/  
木の実のなるころ/雪の日のパーティー/  
ひみつのかいだん/ウィルフレッドの山登り/  
海へいった話/ポビーのあかちゃん  
文・絵 シル・パークレム  
訳 岸田衿子  
講談社 1981年

野ねずみ達の物語で、絵も文も素晴らしく、植物やねずみ達の可愛い服装、家具調度も贅沢。親子兄弟・友人と、野山の景色の中でピクニックパーティー等、ほのぼのとした物語です。時々取り出して読みたくなる絵本です。  
(おてんとさんの会)



『小さな町の風景』  
文 杉みき子 絵 佐藤忠良  
偕成社 1982年

主人公(幼い子ども)が風景の中で、子どものまなざしで、不思議に思ったり、空想したり、おもしろく感じたりしながらいる様子が生き生きと描かれている。坂のある風景、商店のある風景、木のある風景等。美しさにあふれた物語。  
(おはなし泉の森)

どろんこハリ-



ジーン・ジオン  
マーガレット・ブロイ・グラム  
わたなべしげお

『どろんこハリ-』  
文 ジーン・ジオン  
絵 マーガレット・ブロイ・グラム  
訳 わたなべしげお  
福音館書店 1964年

ハリ-という犬が入浴から逃げ出して町の中を遊ぶ様は、まさに子どもそのもの！読んでもらいながらも子ども達は自分がそこで遊んでいる想いになってしまうようです。遊び疲れて戻り、やっぱり安心するのは我が家と納得できます。  
(おはなしココット)

『たんぽぽ』  
文・絵 甲斐信枝  
金の星社 1984年

春が一杯になるたんぽぽは大きな花を得意そうに咲かせる。寒い日は急いで眠る。暖かい日はゆっくり眠る。緑のほったたが膨らんでいる。枯れた花びらの下になんだか白いものが見える。わたげだ！真っ白のわたげだ！感動を子ども達と共有できる絵本で、こんなにうれしいことはありません。  
(語り手たちの会・みやぎ)



『ちいさいおうち』  
文・絵 パージニア・リー・パートン  
訳 いしいもこ  
岩波書店 2001年

静かな田舎に小さいおうちがあった。が、周囲がだんだん開発されていくと共に、自然がこわされていく様子が表現されている。美しい自然と発展していく町の姿が、強く印象に残る絵で描かれている。自然の大切さを教えてくれます。  
(腹話術あおば)



『どうぞのいす』  
文 香山美子 絵 柿本幸造  
ひさかたチャイルド 1981年

うさぎがいすを作った。横にはどうぞのいすの札。それを見たらばがどんぐりのカゴを置いてひと休み。その後動物がやってくる。「空っぽにしてはあとの人にお気の毒」その言葉とほんわかした絵が相まって幸せな気分になる本。  
(おはなしぶーさん)



『もこもこもこ』

文 たにかわしゅんたろう  
絵 もとながさだまさ  
文研出版 1977年

0・1歳児クラスの子どもたちにくり返しせがまれた絵本です。はじめは「？」の子もいますが、くり返しリズム良く読むうちに、それぞれお気に入りの場面を見つけてしょう。  
(てんたん人形劇場)



『ワニのバルボン バルボンさんのおでかけ』

文・絵 とよたかずひこ  
アリス館 1998年

仙台出身の絵本作家、数々ある作品の中で、仙台市八木山動物公園をモデルにされている作品。どこのお話にも欠かさず紹介している。バルボンさんはとてもゆったりとした性格。仙台八木山で誇れる永遠の人気作品でしょう。5冊シリーズで完結していますが、1冊ずつでも充分に楽しめます。  
(読み聞かせボランティア おはなしやま)

わたしと あそんで



『わたしとあそんで』

文・絵 マリー・ホール・エツツ  
訳 よだじゅんいち  
福音館書店 1968年

原っぱで女の子が、ばつたに「あそびましょ」と呼びかけますが逃げてしまいます。かめやりも同じで遊んでくれません。でも、じっとずわっていると…。自然との向き合い方と喜びを女の子と一緒に味わってみてください。  
(絵本と木のおもちゃ 横田や)



『りんごがひとつ』

文・絵 ふくだすぐる  
岩崎書店 1996年

山の中に落ちていたひとつのりんごをめぐる動物たちのかけひき。りんごを取って逃げるおさと追いかける動物たち。実は子どものために必死だったさるの気持ちがわかった動物たち。ラストシーンに心が暖かくなります。  
(IMSやまねこ屋)



『はるのやまはザワザワ』

文・絵 村上康成  
徳間書店 2001年

好奇心旺盛な子ぐまのグルル。お母さんと一緒にみつめ、聞いた春の音。それは溢れんばかりの命の音でした。美しい絵と文が歌っているようです。耳をすましてごらん、どんな音が聞こえてくるかな。  
(絵本おはなし会 ばすてる)



『みどりのくまとあかいくま』

文・絵 いりやまさとし  
ジャイブ 2005年

みどりのくまは緑色、あかいくまは赤色が大好きで自分の色が一番だと思っていますが、ある事がきっかけでお互いの色が好きになっていく、というお話です。続編も出ているのでシリーズとして楽しめる作品となっています。  
(宮城学院女子大学 おもちゃ箱サークル)

『へびのクリクター』  
文・絵 トミー・ウンゲラー  
訳 中野完二  
文化出版局 1974年

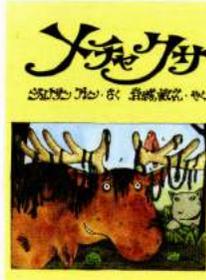
私達にとってこわいへびが、人間(主人ボドさん)とくらし、愛され、へび(クリクター)と人間が助けあってくらしている様子がユニークな絵で表現されている。大切な愛情の深さも伝わり、しつけの面にも生かされます。  
(腹話術あおば)



『はれときどきぶた』

文・絵 矢玉四郎  
岩崎書店 1980年

「子どもって、こういう事が面白いんだよね〜」「自分も子どもの頃、こういう事が好きだったな〜」。親も子どもの世界に戻って面白い事が出来る。同じ世界を共有して、子ども同士になれる不思議な気持ち良さも味わえます。  
(仙台手をつなぐ文庫の会)



『メチャクサ』

文・絵 ジョナサン・アレン  
訳 岩城敏之  
アスラン書房 1993年

北の森にすんでいる大きなヘラジカ。名前はメチャクサ。だってとっても臭いから。臭いにおいは森の仲間の人気の的。ところがメチャクサを食べてやろうと狼がねらってきます。でも、あまりにも臭すぎて、狼はバタン……。  
(ぐりの会)

## 仕事としての絵本創り

とよたかずひこ

テレビで普通にプロ野球中継がなされていた頃、高校受験の勉強の合間に、茶の間に行ってチラッチラツと試合経過を眺めていた。ゲーム終了後、活躍した選手がインタビュを受ける。

「いい仕事ができました！」

うん、仕事？ 野球って仕事か？

今、考えれば当たり前なことだが、当時は何だか楽しそうに身体を動かしているようで、「仕事」と表現されて何となく鼻白む感じだった。

「絵本を描いているなんて、いいですねえ、ユメがあって……」

平日の午後の公民館の一室。およそ五十人ぐらいだろうか、全員女性である。私と同年齢と思われる方々が多い。講演終了後に声をかけてくださったのがその一言である。

ユメねえ、と自分で反すうしてみる。

二〇〇〇年、子ども読書年以降、作家にも読みかかせをという依頼が多くなった。

私の場合は、わが子をひざの上に乗せて、若いパパママも楽な姿勢で一緒に聴いてもらうと

いうスタイルだ。大人だけ対象という講演会はめつたにない。それゆえ乳幼児向けの絵本を創っている作家の話に、これだけの方が集まってくれるというのもびっくりだが、講演中に真剣にメモをとっているお姿を見ると何だか不思議な感じさえする。

演題はあえて「仕事としての絵本創り」としている。身もフタもないタイトルだが、絵本を創ることが仕事なのだということを認識してもらうためだ。ユメのようにふんわりとお話の素が舞い降りてくる訳ではない。アイデアを力業で引きずり降ろしてくるといった方が当たっているだろうか。日々の思考のトレーニングが欠かせない。かといって、ここでこんなに苦勞をしましたよ、汗をかきましたよ、は野暮な話だ。自分は楽しい世界を描いているのだから、あくまでも軽やかに、鼻歌まじりで一晩で仕上げたかのような作品を創りたい、そんな気持ちを話している。

二〇〇一年、『どんどこももんちゃん』発行直後、この絵本を中学二年生に読みかかせしてくださった先生がいて、四クラス分の感想文を版元に送ってくれたことがあった。読者の対象年齢を見ずして本創りをしている私にとって十四歳は想定外の読者層である。しかし、感想文はおもしろかった。

彼らの国語の教科書に太宰治の『走れメロス』が掲載されているらしく、その作品とももんちゃん駆けていく姿を重ね合わせた非常に哲学的に解釈した文章が多かった。そうか、作品は作

家の手を離れると読者のもの、とはこういうことなのだと思感させられた。

そんな中で傑作な、作家にとってズシンとくる感想文があった。

「どんどこもんちゃんの本は小学生低学年の子に読んであげてください。うちらには……」  
 (二組男子)のまっ当な意見から「……五十代の人が、こんな絵本を書いて家族がやしなえるなんて信じられない。とつても楽なお仕事だ、と思っちゃう。だけど、こんな短い本を書くのも大変なのかなあ……」(一組女子)「……前置きも何もなく、いきなり話が始まっているのが少し変に思えた。中学生だからこんな風に思うのかもしれないけれど、こんなものが売れるのか?」

(四組男子)まで。——以上原文ママ

ウーム、と腕を組みながらも、どこか納得している自分がいた。

野球選手なら観客席を見れば、どのくらいのお客が入っているかわかる。作家はわからない。書店に置かれた自分の本を、だれかが手に取ってそれをレジまで持っていくくれるなどという光景を目にすることはまずない。パラパラと立ち読みをしてくれて、そのまま元の位置に戻されるのが関の山だ。レジまでの道のりは果しなく遠い。

先日、埼玉県のある市の児童館で読みきかせをしてきた。

「本の販売はできませんが、とよたさんが在庫としてお持ちの絵本を少し送ってくださいませんか?」

そんな訳で四十冊ほど送っておいた。著者購入は八掛であるから、少しは安く買い上げてもらうことができる。ただし、この売り方は街の本屋さんには申し訳ないので、個人的にはやむを得ない場合にだけしている。

完売だった。予想外である。児童館で働いておられる職員の方々が、他館も含めて買ってくださったようである。

後日、担当の事務の方からお礼状がきた。

「……小学生の子どもたちも、絵本を買いたいとサイフをひろげ、昼ごはんを買わなければ本を買えたのに」と何度も言っていました。私たちが「お昼ごはんは大事よ、児童館でたくさん買ったから読もうね」と笑い合いました。」——原文ママ

そうだ、その通り。その答えがうんと正しい。

(絵本作家)

テーマⅡ

疲れた時のおすすめ本



## こどものほんのみせ ポラン

住 所 〒981-0021 仙台市青葉区中央4-4-4

電 話 022-265-1936

営業時間 10:00~18:00

定休日 日曜日・祝日

※上記以外の日にお休みになることがありますので、  
ご来店の前にお電話してからお出かけください。



おとなはあせらずに、  
子どもたちと本を通じて  
一緒に楽しんでね。

ますだ かじこ  
増田 家次子さん



▲楽しい店内です。



▲この看板が目印です。

▲ビルを入れて  
右手にあります。

仙台朝市の近くのビルの1階に「こどものほんのみせ ポラン」があります。1977年に立町の児童書専門店としてスタートし、1987年にこの場所に移転しました。約2.5坪の小さなお店ですが、児童書全般を中心に、子どもの本に関する書籍、スタンダードな絵本が、天井までぎっしりと並んでいます。

お店の中に入ると、増田家次子さんが笑顔でむかえてくれます。増田さんは聞き上手な方で、贈り物の本の相談をすると、あれこれ話をしながら、ぴったりの一冊を選んでくれます。子どもが本を読まない、とあせる親御さんが多いけど、あまりうるさく言わないであげると増田さん。まず自分が好きな本を見つけて読んでみてとのこと。おとなが楽しんでいると、子どももいつか、本を読むようになる時が来るのだといいます。

増田さんとおしゃべりを楽しみながら、お気に入りの一冊を見つけてみてください。



『おれはティラノサウルスだ』  
文・絵 宮西達也  
ポプラ社 2004年

むかしむかしおむかし、フテラドンのおとうさんとおかあさんがいました。おかあさんがいわやまのてっぺんにたまごをひとつつみました。優しい涙があふれてくる心温まる絵本です。人の幸せや思いやりが大切に書かれており、お母様方が感動してくれます。(語り手たちの会・みやぎ)



『きつねのでんわボックス』  
文 戸田和代 絵 たかすかずみ  
金の星社 2006年

きつねと人間の子どもの触れ合い、かけがえのない命は一つしか無いのだと改めて気づかされます。子育てに振り回され、辟易している日々。外から帰ったやんちゃな我が子を、きっと抱きしめなくなるかも知れません。(ふみこぼあばのおはなし)



『グレイのしっぽ』  
文・絵 いせひでこ  
理論社 1999年

グレイというハスキー犬との日々の中で、楽しみも苦しみも悲しみも受けとめながら、惜しみない愛情をそそぐ作者に気持ちが寄りそえます。子どもを育てることの辛さよりは楽しさをそこから感じるのには、私だけではないと思います。いせひでこさんの本はどれもおすすめしたいです(深いです)。(おはなしココット)



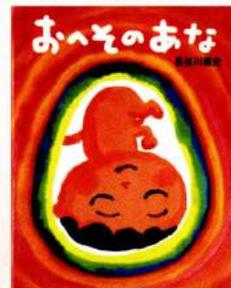
『今日』(原題: Today)  
訳 伊藤比呂美 絵 下田昌克  
福音館書店 2013年

日本の疲れ果てた、でもがんばって子育てをしている母親たちに伝えたいとニュージーランドの子育て支援施設の壁に貼ってあった詩を写して持ってきた。英語圏には人を慰め、励ますためのよみ人知らずの詩がいくつも流布している。(仙台手をつなぐ文庫の会)



『いったでしょ』  
文・絵 五味太郎  
偕成社 2004年

母馬「つまずきますよ」。子馬「つまずいた!」...母の心配通りごとく子馬はおちたり、ぶつかったりすべったり。何度失敗しても母馬は悠然と見守り、ここぞの時に背中を押してあげます。1分で読める希望の育児書だと思えます。(読み聞かせボランティア どうぐりころころ)



『おへそのあな』  
文・絵 長谷川義史  
BL出版 2006年

赤ちゃんって母親だけで産み出すものではありません。周りの人がいて、赤ちゃん自身の力があり、生命と言う大きなつながりがあるって産まれて来てくれるのです。子どもが少し大きくなると忘れがちになりますがこの絵本は心を暖かくしてくれます。(とびだす絵本)



『おかあさんがおかあさんになった日』  
文・絵 長野ヒデ子  
童心社 1993年

子どもを授かり、喜びと生まれるまでの大丈夫かなというあの不安。やっと生まれて、お母さんになった日のことを思う。私の赤ちゃんありがとう。そして今、兄となった孫が弟を見て「ボクもママから生まれたんだね。」と語りかけてくる。(絵本おはなし会 ばすてる)



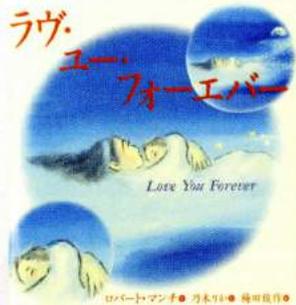
紙芝居『おかあさんのはなし』  
原作 アンデルセン  
脚本 稲庭桂子  
絵 いわさきちひろ  
童心社 1964年

病気の子どもを死神に奪われた母親は、自分の目も黒髪も失っても死神を追いかけ、今後子自身の人生が悪かろうと生きるのを望むのが問われる。子が自分の人生を生き抜くために闘うだろうと。子の命を取り返す。生きる尊さをうたう。(紙芝居文化の会みやぎ)



『大きい1年生と小さな2年生』  
文 古田足日 絵 中山正美  
偕成社 1970年

体は大きいけれど頼りない1年生の男の子が、しっかり者だけと体の小さな2年生の女の子と通学したり遊んだりしていく中で成長していく話の本。自分が小さかった頃を思い出したり、自分の子どもの気持を考えたりしてあげられる心温まる本です。(とんびの会)



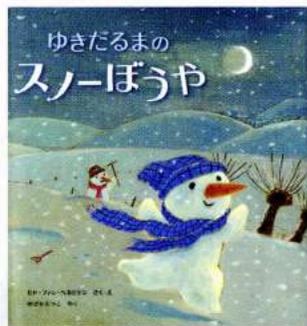
『ラヴ・ユー・フォーエバー』  
文 ロバート・マンチ 絵 梅田俊作  
訳 乃木りか  
岩崎書店 1997年

「アイ・ラブ・ユー いつまでもアイ・ラブ・ユー どんなときもわたしがいていくかぎり あなたはずっと わたしのあかちゃん」小さかった子どもは、どんどん、どんどん大きくなっていきます。母の愛はどこまでもいつしよです。  
(ぐりの会)



『まあちゃんのながい髪』  
文・絵 たかどのほうこ  
福音館書店 1995年

誰でもいつでも、想像の世界では思いきり遊べるんだってまあちゃんが思い出させてくれました。思いついたもん勝ちの発想と、底ぬけに明るい絵に思わず大笑い。そうだ、私も負けずに面白いことを考えちゃうぞ。そして明日も笑顔になろう！  
(ちいさいにんぎょうげき まるべと)



『ゆきだるまの  
スノーぼうや』  
文・絵 ヒド・ファン・ヘネヒテン  
訳 のざかえつこ  
フレーベル館 2011年

ゆきだるまのスノーぼうやは、動くと溶けると言われ、ずっと立ったまま。でも我慢できず動いてみました。知りたがりやの子どもに自分で確かめる勇氣と、その先にある新しい世界への旅立ちの本です。  
(おはなしの森)



東山魁夷  
コンコルド広場の椅子



新書 33

『コンコルド広場の椅子』  
文・絵 東山魁夷  
新潮社 1993年

毎日、目の前の事に追われていると自分中心にしか考えられなくなってしまう…イスという視点からやさしく語り惜されている気持ちになり読み終えた後、少し違った方向を見ているかもしれません。色彩も素晴らしく引き込まれます。  
(ふみこぼあばのおはなし)



『藤田浩子の 赤ちゃんのあやし方・育て方』  
編 藤田浩子 絵 保坂あけみ  
一声社 2013年

赤ちゃんが生まれたたらしっかり赤ちゃんと遊びましょう。とは言っても遊び方がわからない時や遊びの幅を広げたい時にどうぞ、わらべうたやあやし方他、赤ちゃんの喜ぶことをいろいろ紹介しています。親も子どもも笑顔になりますよ。  
(みやぎ親子読書をすすめる会 わらべうた)

ぼくを探しに  
シルヴァスタイン  
倉橋由美子



『ぼくを探しに』  
文・絵 シルヴァスタイン  
訳 倉橋由美子  
講談社 1979年

中学が高校くらいの時に会った本です。自分探しという意味もあるでしょうが、シンプルな表現がお気に入りです。何度もくり返しみていた絵本です。  
(てんたん人形劇場)



『ザガズー じんせいってびっくりつづき』  
文・絵 クエンティン・ブレイク  
訳 谷川俊太郎  
好学社 2002年

しあわせな二人への贈り物は、ザガズー。ピンクのかわいい赤ちゃんです。お世話はいへんけど、かわいいザガズーがある朝起きてみると、はげたかの赤ん坊に！それから……副題のとおり、ほんとうに、人生ってびっくりつづき。  
(絵本と木のおもちゃ 横田や)

## 「聞くことの Copp」が満ちるまで

宮川健郎

子どもたちへの読み聞かせがブームのようになったのは、二〇〇〇年の「子ども読書年」のあとでしょうか。あるときから、子どものそばにいる大人たち、親、教師、図書館の児童サービスの人たちなどから、子どもたちは、読み聞かせやお話し会は大いに楽しむのに、なかなか一人読みに移れないという、なげきのようなことばを聞くことが多くなりました。子どもたちを早く大きくしたいという、独特の焦りも感じられることばで、私は、まだ読み聞かせが足りないのではないですかと答えたりします。

日本語は文字をとまなう言語ですが、学齢期前後までの子どもたちは、「無文字」の時期を生きています。日本語によってつくられる文化は、W・J・オングふうにいえば『声の文化と文字の文化』一九八二年／桜井直文他訳、藤原書店、一九九一年）、『文字の文化』にほかなりませんが、幼い子どもたちは、「声の文化」のなかにいます。小学校に入学したから、すぐに「文字の文化」のなかに入るかという、そうではないでしょう。小学校低学年の子どもは、たと

えば、「乾電池」を「電気」といって、大人に訂正されたりします。彼は、ことばを文字（この場合は漢字）によって把握しているのではなく、耳で聞いてつかまえています。「でんち」と「でんき」は、音が似ています。それに、彼は、「でんち」を「でんき」といった方がいいじゃないかと思っています。彼の「でんき」ということばの意味の範囲には、「でんち」もふくみこまれているのです。こうしたことから、彼がまだ「声の文化」のなかで暮らしていることがわかります。オングの著書からも読みとれるように、「文字の文化」が「声の文化」より優位なわけではなく、二つは別の文化なのですが……。子どもたちが「声の文化」から「文字の文化」へと住みかえて、ひとりで黙読するようになるのは、（これは個人差が大きいです）小学校三、四年生以降でしょう。だから、小学校三年生くらいまでの子どもたちには、あいかわらず、あるいは、さらに積極的に読み聞かせで物語をとどけていいと思います。

子どもたちに読んであげる「声」は、身体をつづき、いや、身体そのものです。「声」を聞くのも身体なのですから、そこには、身体と身体の間なまなましい関係が生まれます。私には、あのイメージがあります。子どもたちの体のなかには、「聞くことの Copp」とでもいうべきものがあるのではないのでしょうか。読んであげる「声」が、その Copp にそがれ、やがて、それを満たしたとき、ようやく、子どもは、自立した読者になる……。それなら、いま、子どもた

ちにどんな物語を読んであげられるのでしょうか。

私は、この欄で、すこしくどいほど、子どものための物語（ことに幼い子どもの文学）は、口で話す「お話」と切りなせないものだと思ってきました。けれども、私の気もちでは、まだまだ言いたらないような気がするのです。（カッコ内原文）

雑誌『母の友』一九五九年一二月号の「12月の本だな」の欄、「子どもから学ぶこと」と題する石井桃子のエッセイの冒頭です。このエッセイについては、何度も書いたことがあります（宮川「声」のわかれ』『日本児童文学』二〇〇〇年九・一〇月など）、簡単にくりかえしします。

石井桃子は、つづけていいいます。——「読んでやったり、口で話したりできないお話は、子どもにはおもしろくないものです。そして、幼い子どもにとっては、おもしろいこと、いいことはおなじなのですから。」そして、石井は、この考えにもとづいて、この年の八月に刊行されたばかりの佐藤さとる『だれも知らない小さな国』（講談社）をつづきものにして子どもたちに読み聞かせてみたといいます。石井は、『だれも知らない小さな国』を「日本の創作童話にめずらしい筋の通ったファンタジー」としながら、実際に読み出してみると、「佐藤さんが、念を

入れてコロボツクルの出てくる山を、春夏秋冬にかえて、その情景を描写しているあいだ、子どもたちは、モゾモゾとからだを動かし、ひとりは、そっと出てゆきました。」と書きました。

石井桃子は、読み聞かせをとおして『だれも知らない小さな国』を批判しましたが、佐藤さとるのほうは、黙読で物語を楽しむ十代の子どもたちを読者として意識していたでしょう。ここには、日本の子どもの文学の分かれ道があります。音読する「声」とわかれた、佐藤さとる以降の「現代児童文学」は、読者層の中心を年上の子どもへと移動させ、黙読される書きことばとして緻密化していきます。そのことによって、さまざまな主題を深めることにもなったのです。長い戦争を経験したのちの「現代児童文学」は、「戦争」の悲惨を描き、戦争を引き起こすこともある「社会」を描こうとしました。こうした「現代児童文学」のあり方そのものが、幼年文学の危機をまねくことにもなります。幼年にむけて書かれた読み物も、本はそれなりの数が出つづけているけれど、それほど話題になるものはありません。すでに評価の安定したものが、くりかえし読まれています。

いま、子どもたちの「聞くことのコップ」を満たすことのできる物語はあるのでしょうか。「現代児童文学」は、音読する「声」をとりもどさなければならぬと思うのですが……。子ども文学の未来も、子どもたちに様々なものを読んであげるなかで、さがしていかなければならないような気がしています。

（児童文学研究者）



テーマⅢ

いつか読んで欲しい本  
手渡したい本



## 絵本と木のおもちゃ 横田や

住所 〒981-0931 仙台市青葉区北山1-4-7

電話 022-273-3788

FAX 022-275-7734

営業時間 10:00~19:00 定休日 水曜日



横田 重俊さん

横田 敬子さん



▲ 神棚には「ねずみくん」たちがいます。



▲ いろいろな本やおもちゃが待っています。  
時間がいくらあっても足りません。



▼ 味のある看板が目印です。



北山の交差点にある、立派な和風建築のお店が「横田や」です。明治時代に建てられた建物は元々味噌しょうゆのお店だったそうですが、絵本と木のおもちゃに魅せられた横田さんご夫妻が、1978年にお店を開きました。定番の絵本を中心に、横田さんたちの大好きな作家さんの絵本が、ところ狭しと並んでいます。またヨーロッパの木のおもちゃや、職人さんの手作りのおもちゃなど、一つ一つぬくもりを感じるものばかりです。

これだけたくさん本に囲まれると迷ってしまいますが、本探しのひけつをうかがってみると、いろんな本を手にとってほしいとのこと。実際に手に取っていると、そのうちに本が呼んでくれるようになるよと横田さん。

金曜日は「おはなし金曜日」が開かれています。絵本に囲まれた空間でのお話は、きっと大きくなって忘れられない思い出として残るでしょう。

小さい頃から本に親しむ楽しさを体感できるお店です。もちろん大人の方も。



『たかご』

文 清水真裕 絵 青山友美  
童心社 2011年

日常では遙か昔の時代を、何の前触れもなく現代の子ども達の中へ。読み進めていく内に時代の貴重な言葉や衣装など、子ども達の葛藤も含め、最後にはお互いを理解し全く違和感を感じなくなる柔軟さは、子ども自身に感じてもらえるのではないかと。(読み聞かせボランティア おはなしやま)

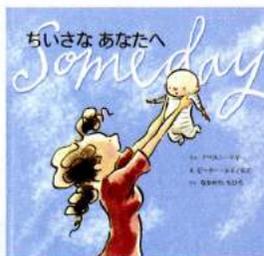
としょかんライオン



『としょかんライオン』

文 ミシェル・ヌードセン  
絵 ケビン・ホークス  
訳 福本友美子  
岩崎書店 2007年

図書館が好きなライオンの話です。心優しいお話の好きなライオンが、困った人を助けるために、決まりを守れなくなるのですが、本当に大事なものは何かということに気づかされます。長いお話ですが感動の一冊です。(おてんとさんの会)



『ちいさなあなたへ』

文 アリスン・マギー  
絵 ピーター・レノルズ  
訳 なかがわちひろ  
主婦の友社 2008年

女の子の誕生を喜び、その子が様々なことに出会い成長する姿を見守る母の優しさが綴られています。その子も親になり、そして年老いた時、母親のことを想い出して欲しい。親への感謝が心にあふれてくる本です。(おはなしの森)

紙芝居『のぼら』

原作 小川未明 脚本 堀尾青史  
絵 桜井誠  
童心社 2005年

国境に咲く野ばらを見た国境警備のそれぞれの国の年寄りと若者は声をかけ合い仲良くなった。戦争が起きて敵同士になった二人。美しい物は人の心を結びつけ、戦争はそれを引き裂く。平和を築くには…余韻を残し心に沁みる作品。(紙芝居文化の会みやぎ)



『月のうさぎ』

文 瀬戸内寂聴 絵 岡村好文  
講談社 2007年

気の毒なお爺さんに兎が身を捧げる場面にあっと驚かしますが、作者が人へ思いやりの心が育ってくれることを願って、子ども達の為に初めて書いた本です。年令に合わせて難しい所は削ったり、感想を付け加えたりして読んであげて下さい。(とんびの会)

紙芝居『二度と』

脚本・絵 松井エイコ  
童心社 2005年

世界初の原子爆弾が1945年8月、広島と長崎に落とされた。70年を過ぎた今もお後遺症に苦しんでいる人たちがいる。その上、3.11の福島原発。地球上のあらゆる生物のため二度と私たちの手でくり返さないでと阻止の願いをこめた作品。(紙芝居文化の会みやぎ)

『少年少女世界の文学』  
全集 24巻・別巻2

河出書房新社 1966年

一冊一冊が世界の国々の名作で全集にしている。わかりやすい文章で綴られている。カラーのさし絵が入っていて楽しい。アンデルセン童話。ふしぎの国のアリス。小公子、小公女。トムソーヤの冒険等。気軽に手にとって。(おはなしの森)



『おいしいのぼうけん』

文 ふるたたるひ 絵 たばたせいひち  
童心社 1974年

息子が高校生だった時「ねずみばあさんの本って？」と聞いてきた。しばらくして「おいしいのぼうけん」だと思い出した。5才の頃に読んであげた物語が、12年間も息子の心の中で生きていたなんて、すてきな事だと思いませんか？(仙台むかし話の会)

103

世界中の子どもたちが



『世界中の子どもたちが103』

文・絵 平和を作ろう！  
絵本作家たちのアクション  
講談社 2004年

103名の人気絵本作家が協力して作り上げた、平和をつくろうと呼びかけている絵本。楽譜が付いているので子どもたちと一緒に歌うのも楽しい。仙台出身でおなじみのとよたかずひこさんもでんしゃにのって参加している。(みやぎ親子読書をすすめる会)



『5ひきの小オニがきめたこと』

文・絵 サラ・ダイアー  
訳 毛利衛  
講談社 2003年

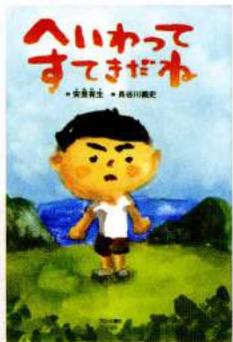
宇宙飛行士、毛利衛氏の訳で日本の子ども達に紹介された事の素晴らしさを強く感じ、機会あるごとにお話会で読んでいます。地球に住む人間の心を小オニに託し、簡潔な言葉で訴えています。絵も類のない表現で心に残るでしょう。(読み聞かせボランティア おはなしやま)



『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』

編 くさばよしみ 絵 中川学  
汐文社 2014年

人が人として生きる上で、決して忘れてはいけない事。けれどももすれば忘れ、欲望のまま動いてしまう。物を持つ事を幸せと勘違いし本当の幸せを見失っている、多くの現代人へのメッセージ。(とびだす絵本)



『へいわってすてきだね』  
詩 安里有生 絵 長谷川義史  
ブロンズ新社 2014年

2013年6月23日、沖縄全戦没者追悼式で、与那国島の小学一年生安里有生君が朗読した「へいわってすてきだね」という詩を聞いて感動した絵本作家、長谷川義史氏が、安里君の平和への願い、思いを伝えたいこの絵本を作った。(みやぎ親子読書をすすめる会)

ぼちぼちいこか



『ぼちぼちいこか』  
文 マイク・セイラー 絵 ロバート・グロスマン  
訳 いまえよしとも 偕成社 1980年

元々は、アメリカ生まれの絵本。30年以上前に今江祥智さんの絶妙な訳でステキな絵本となりました。「ぼちぼちいこか」目まぐるしい日々嫌気がさした時、自信をなくしかけた我が子に、何も言わずずっと手渡したい一冊の絵本です。(おはなしぶーさん)



『わすれられないおくりもの』  
文・絵 スーザン・バーレイ  
訳 小川仁央 評論社 1986年

心暖まる絵本です。アナグマが動物達に接した姿—一匹一匹(ひとりひとり)に知恵やくふうのしかたを教えてくれたおかげで、互いに助けあうことができるのでした。アナグマの死から人間の生き方を静かに語りかけておられます。(腹話術あおば)

お互いに寄りそいながら、生きて行くことの大事さが伝わる本。年をとること、最後をどうむかえるか、考えさせられます。人と人との思いやり、やさしい心など、アナグマの死は多くの動物に忘れられない思い出とあたたかい心を残しました。(仙台カナキンくらぶ)

仲間から慕われていたアナグマは、年をいて死を迎えます。仲間は悲しみに暮れますが、思い出を語り合うことで、自分達の心の中にアナグマが存在し続ける事に気づきます。人生のあり方を、世代を越えて届けてくれる絵本です。(読み聞かせボランティア どんぐりころころ)



『へいわってどんなこと?』  
文・絵 浜田桂子  
童心社 2011年

日本・中国・韓国の絵本作家が手をつなぎ子どもたちに贈る平和絵本シリーズの第一作として浜田桂子さんが描かれました。何気ない日常生活の中に平和な暮らしがあること、それを守っていくことの大切さ、子どもたちに読んであげたい。(みやぎ親子読書をすすめる会)



『花さき山』  
文 斎藤隆介 絵 滝平二郎  
岩崎書店 1969年

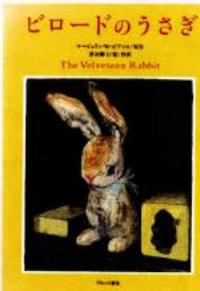
きれいなきり絵、滝平二郎の代表作です。山菜採りに行き山んばに会ったあや。やさしいことをすると美しい花が一つ咲く。方言があったかく感動させられる物語です。絵を見ているだけでも心がほっこりします。(絵本おはなし会 ばすてる)

山菜をとりに山へ入ったあやであったが、山の奥で道に迷ってしまう。そんなときあやが目にしたものは、山んばと辺りに咲く美しい花であったというお話です。やさしくも漂々しい、そして心に訴えかける切り絵の美しさも見所です。(宮城学院女子大学 おもちゃ箱サークル)



『春になったら苺を摘みに』  
文 梨木香歩  
新潮社 2002年

著作は、イギリス留学中に下宿先で体験した異文化とのふれ合いの中で、自分がどう生きていくか模索し、悩みながら読者に問いかけます。これからどんどん自分の世界を広げていく子どもたちに読んでもらいたい一冊です。(仙台手をつなぐ文庫の会)

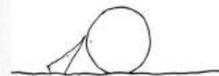


『ピロードのうさぎ』  
文 マージェリィ・W・ビアンコ  
絵・抄訳 酒井駒子  
ブロンズ新社 2007年

“ほんもの”子どものほんとうの友だちになったおもちゃのこと。ピロードのうさぎはさいしょはたいへんりっぱでした。ぼうやの友だちになれましたが、どんどんよごれていきます。うさぎは“ほんもの”になれるのでしょうか。(ぐりの会)

シェリル・シルヴァスタイン 倉橋由美子訳

『ほくを探しに ビッグ・オーとの出会い』



『ビッグ・オーとの出会い 続ほくを探しに』  
文・絵 シェリル・シルヴァスタイン  
訳 倉橋由美子 講談社 1982年

前作「ほくを探しに」との出会いから数年経ってからだったでしょうか?その時、どう感じたのかは全く覚えていません。自分を見つめたのでしょうか。今回、改めて開いてみました。「やってみたことはあるの?」この一言が心に届きました。(てんたん人形劇場)



『プーさんとであった日』  
文 リンジー・マティック  
絵 ソフィー・ブラッコール  
訳 山口文生 評論社 2016年

誰でも知っているクマのプーさん。そのモデルとなったクマとの出会いから始まり、戦争の中でも人とクマとの信頼感、愛情が全ページにあふれています。最後の写真も違和感なく受けとめられます。(おはなしココット)

## あなたがあなたになるために

清水真砂子

本のことを考えるとき、ここ何年か、きまって思い出される短歌があります。

愛だけがわたしを救うと思ってた今日手にとった本を読むまでは

(李祐美 「毎日歌壇」 2010. 4. 18)

本というものが時にこれほどの力をもって私たちを支えてくれる。そのことに気づいた喜びをこんなふうに率直に歌ってくれた人がいる。出会って七年以上になる今も、私は口ずさむたびに、ほっこりとうれしくなります。

でも、本はいつもこのようにはばかり受けとめられているわけではありません。

本を読むと人は賢くなるとか、本を読むと心がゆたかになるとか、私たちはさまざまところで、こんな決まり文句を聞かされて育ってきました。もっとも今は「賢い」という言葉はほ

とんど日常生活から姿を消して、かわりにあちこちで聞かれるのは「勉強ができるようになる」という言葉でしょうか。「読書運動」の中ではさすがにここまで言うのははばかられてはいませんが、学校の先生の中にも、親御さんたちの中にも、そう考えている人は多く、本の広告にも、読書量の多い少ないを子ども達の学力の向上と結びつけようとするあからさまな言葉がとびかっけていたりします。

そういう現象は結果としてはたしかに現れるかもしれませんが、それが読書という行為に期待する第一のことだとすると、読書が人間にもたらすゆたかさを端からどれほど狭く限定することになってしまいか。それを考えると、なんでもつたいたいことを！ と顔をしかめずにはられません。それにそもそも、学力とはいったい何なのか。早々にそれを決めつける愚もおそれます。

同じおそれは、「本を読むと心がゆたかになる」という言葉にも私は感じています。

「心がゆたかになる」とは、いったいどういうことをいうのでしょうか。私たちはそこに怒りを、きりく〜と心身にくいこむ悔いを、その中に発見してしまう自身のずるさや他者への嫉妬を、憎しみを、瞬間芽生える殺意を想定しているのでしょうか。そうしたものに気づくことを「心のゆたかさ」の中に入れて考えているのでしょうか。



大人の文学についてならいざ知らず、子どもの文学についてそんなことをいうのは筋違いでは？ そういう声はすぐにもあがってくるかもしれません。でもこの三十年余り、私は「かわいい」「かわいそう」「けなげ」「やさしい」がなくなったら、絵本を含む日本の子どもの本はどんなにか、ゆたかになるのに、とずっと思ってきました。大人自身の日々が問われないうち、こうした心情に同調することを私たちは子どもたちに求め、それを「心ゆたかになる」といつているのではないか。そんなわけで、実は私はバラリンピックの盛り上がりにも長年ひそかな危惧を抱いてきました。ですから昨夏「感動ポルノ」という言葉に出会った時は、なお幾分か危惧は抱きながら、自分のこれまでの漠とした不安、疑いが八割かた掬い揚げられた感じがしたものです。その粗さはこれから少しづつ知恵を出し合って直していく必要があるとしても、そうなのです。すぐれた文学は安っぽい同情も軽卒な同調も求めてはいないし、根拠のない、無責任な解決方法も示したりはしていません。

マーガレット・ワイズ・ブラウンは絵本『たいせつなこと』（うちたややこ訳 フレーベル館）の最後を「でもあなたにとってたいせつなのはあなたがあなたであること」という言葉で結んでいます。読書はまさにその人がその人になるために、さらにはその人がその人であるために大切な行為のひとつなのかもしれません。

実はそのことをあらためて考えさせてくれる出来事に昨年暮、でくわしました。

ある町の高校生たちが中心になって開いてくれた講演会で、私は、青春の日、他人と交わることのきわめて少なかった自分がひとり勉強をしつづけるうちに、気がついたら今では、本の中で出会った人々だけでなく、国境を超えて世界のあちこちに、卒直に語らい、喜びを共にすることのできる友人たちを持っている、そのことへの我ながらの驚きと愉しさを語ったのですが、後日いただいた感想の中に、「学ぶことが他者とつながる力を培ってくれるなんて、初めて聞いた」という趣旨のことが高校生だけでなく一般の市民の方々の感想の中にも複数見出されたのです。

そう書いてくださった方々が、勉強が競争のためにあるのだと思ひ込まされていたとは思いません。ただ感想を読んでいてふっと思い出したのは、イングランドはグレイト・シエルフォードのお宅に幾度目かピアスさん<sup>(\*)</sup>を訪ねたある秋の日、彼女がつぶやいた言葉でした。

「ふしぎね。あなたは日本人のままにいるのに、わたしたちってこんなに深くわかりあえる。」

（児童文学評論家・翻訳家）

\*ピアスさん＝アン・フィリップ・ピアス（一九二〇～二〇〇六）。イギリスの児童文学作家。



### 『ダークホルムの闇の君』

文 ダイアナ・ウィン・ジョーンズ  
訳 浅羽英子  
東京創元社 2002年

児童向けと大人向けとを行き来しているDWJ作品の中でも、もっとも濃密なブラック(辛口ユーモア)ファンタジー。本場英国でハリー・ポッターを抑えミンピーク賞を受賞しています。ファンタジーは文化や価値観の衝突が楽しい。  
(福山恵子)



### 『チリメンモンスターをさがせ!』

監修 きしわだ自然資料館  
きしわだ自然友の会 日下部敬之  
偕成社 2009年

チリメンジャコの中に潜む様々な海の生き物たちを見つけ出す本です。エイリアン!?のようなエビの赤ちゃんなどにビックリしながら見つける、調べる、知る楽しみを味わえました。  
(佐々木恵美)



### 『点子ちゃんアントン』

文 エーリヒ・ケストナー  
訳 高橋健二  
岩波書店 1962年

「女の子」らしくない、おてんば点子ちゃんと、料理上手な男子・アントンの友情が新鮮で、まっすぐな点子ちゃんに憧れました。そして、食いしん坊の私は「ナンのおつゆ』『マグロの缶詰』『ジャガイモの塩ゆで』など、さりげなく登場する食べ物にも興味深々でした。  
(赤間亜生)



### 『手ぶくろを 買いに』

文 新美南吉  
絵 黒井健  
偕成社 1988年



### 『龍の子太郎』

文 松谷みよ子  
絵 久米宏一  
講談社 1960年

怠け者の男の子・太郎が、龍になった母親を探して旅をする中で成長していく。日本の民話や伝説をもとに豊かな表現で物語世界へ誘う。小学2年生の頃、友だちが貸してくれて夢中になって読んだ本。この一冊が私を本好きにしてくれました。  
(久保美智子)



### 『椿の海の記』

文 石牟礼道子  
河出書房新社 2013年

4才の自分がとらえた世界を大人の言葉で語る事でとらえ直さうな文章でしょうか。ほの明るい浮遊感と土臭い薄暗さと、人の生々しさ。知らない土地と時代なのに苦しくなるほど懐しくなっていました。  
(佐々木恵美)

幼い頃、子狐と同じ気持ちになってドキドキしながら読んだ。子狐が間違っって狐のお手々を出した時には息をのんだものだ。命ある全ての動物を慈しむ気持ちをもった大人に自分がなれているか省みるきっかけになる絵本。  
(阿部朋子)

## 職員おすすめ本



### 『赤毛のアン』

文 ルーシー・モード・モンゴメリー  
訳 村岡花子  
偕成社 1968年

初めて読んだ時、「アンはわたしだ」と思いました。楽しいこともないわけではなかったけど、つらいことも多かった子ども時代、空想と想像の世界が私の助けでした。私を本好きにさせた決定的な一冊。どんな子どもも、そんな一冊に出会えますように。  
(赤間亜生)



### 『いやいやえん』

文 中川李枝子  
絵 大村百合子  
福音館書店 1962年

反抗期のお子さんへお薦めです。無茶なワガママはみんなと違うおやつを与えられてしまう危険があることを気づかせます。ただし赤が嫌いだからリンゴをくれない行為に対し、「皮を剥けば赤じゃないよ」と言われる可能性も…。  
(大衡直子)



### 『霧のむこうのふしぎな町』

文 柏葉幸子  
絵 竹川功三郎  
講談社 1975年

ピエロの柄のついた傘にみちびかれて、少女が不思議なひと夏を過ごす物語。話に出てくるような小さな森が近所にあり、「もしかしたら…」と、何度も近くまで探検に行きました。違う世界へひょいと連れて行ってくれた一冊です。  
(渡部直子)

### 『クマのプーさん』

文 A.A.ミルン  
絵 E.H.シェパード  
訳 石井桃子  
岩波書店 2000年

大人気キャラクターのプーさんが、実はティベアだったなんて!ちょっと「ばか」なクマのぬいぐるみのプーと仲間たちの愉快で楽しい物語。なんといっても、E.H.シェパードの挿絵が愛らしく、プーといえば、この絵です。  
(三條望)



### 『ことばあそびうた』

詩 谷川俊太郎  
絵 瀬川康男  
福音館書店 1973年

「はなののののはな はなのなにあに…」小学生の頃、この詩のリズムと響きが好きて、呪文のように繰り返していました。日本語の持つ美しい響きを声に出して体感でき、谷川さんの詩の世界を通して言葉の深さを知ることが出来ます。  
(伊藤美菜子)



### 『ぼくは海になった』 東日本大震災で消えた小さな命の物語』

文・絵 うさ  
くもん出版 2014年

命の重さに優劣はないはずだが…東日本大震災では人間が最優先された。震災後何年たっても、家族だった犬や猫たち、小さな命を助けられなかったと苦しむ人々は大勢いる。悲しみの底にいる家族の心に寄り添った絵本。  
(阿部朋子)



### 『ラインの虜囚』

文 田中芳樹  
講談社 2005年

遅筆で知られる著者が作家と締切についてデュマに語らせている箇所だけで、にやりとします。地理歴史、名作小説の登場人物を知っていると更に面白く、知識を得る楽しみを知る歴史、時代小説の取りかかりとしてお薦め。  
(福山恵子)



### 『毎日かあさん』

文・絵 西原理恵子  
毎日新聞社 2004年

漫画家・西原理恵子の体当たり子育て記録。好き嫌い分かれるかもしれませんが、ぜひ一読を。生きていく上で何が大切か、ぼろぼろとヒントが落ちていきます。元気がでない時、思いきり笑い、頼りになる一冊。  
(渡部直子)

## 仙台文学館

〒981-0902 宮城県仙台市青葉区北根 2-7-1  
TEL.022-271-3020 FAX.022-271-3044  
http://www.sendai-lit.jp

開館時間 9:00から17:00 (入館は16:30まで)

休館日 月曜日 (休日の場合は開館)、  
休日の翌日 (土・日・休日の場合は開館)、  
第4木曜日 (休日の場合は開館)、年末年始

電話番号 022-271-3020

バス情報 市営バス・宮城交通バス  
仙台駅前から約20分  
「北根二丁目・文学館前」下車 + 徒歩約5分

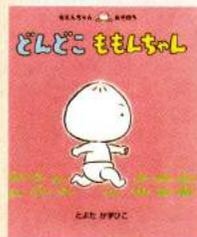
駐車場 40台 (無料)



### 『扉のむこうの物語』

文・絵 岡田淳  
理論社 1987年

小学生にお薦めの作家といえば、とにかく岡田淳さんです。本にのめり込む楽しさを教えてもらいました。「人間性を定義するラベルを背中に貼られ生活する人たち」など今でも折に触れ思い出します。「こそあどの森の物語」、「選ばなかった冒険」などもぜひ。  
(福山恵子)



### 『どんどこもんちゃん』

文・絵 とよたかずひこ  
童心社 2001年

子どもが幼い頃、よく「ももんちゃん劇場」を開きました。子どもは「どんどこ〜」のフレーズにあわせて布団をがけまわり、私は、朗読と熊と母親の一人三役。「どちっ」の場面でフレーズに合わせて転んだ子どもは、最後は「どーん」とダイブ！ 体力勝負の読み聞かせでした。  
(赤間亜生)



### 『はなのすきなうし』

文 マンロー・リーフ  
絵 ロバート・ローソン  
訳 光吉夏弥  
岩波書店 1954年

スペインに花のすきなフェルジナンドという仔牛がいました。いつものようにのんびり花の匂いをかいていたら、蜂に刺されて大暴れ。それを見ていた牛買いは、フェルジナンドを闘牛場へ連れて行ってしまいます。自分らしさを大事に思える本。  
(庄司潤子)

### 職員おすすめ本



### 『のんのんばあとオレ』

文・絵 水木しげる  
講談社 2010年

水木しげるが、鳥取県境港で過ごした少年期の自伝的漫画。「のんのんばあ」の思い出とともに、目には見えない妖怪やお化けたちの世界が生きいきと描かれている。青少年と一緒に豊かな自然世界を味わうことができる。  
(阿部朋子)



### ピクシー絵本 (デンマークの絵本)

小学館 1970年代

目の覚めるような色とかわい  
い絵に惹かれ、飽きず眺  
めた忘れられない本です。  
心やさしい思いやりにあふ  
れた話、ちょっぴり失敗し  
たことをどうして解決でき  
るかを考えさせるお話など。  
一度フェリシモで復刊  
されています。  
(菊地五月)

# 仙台市内の図書館案内

今回ご紹介した本は、現在購入が難しいものが多いですが、市内の図書館で所蔵しています。どうぞ探してみてください。

**開館時間** 平日 10:00～19:00 (市民図書館は20:00まで)  
土・日・休日 10:00～17:00 (市民図書館・若林図書館・広瀬図書館は18:00まで)

**休館日** 月曜日 (休日の場合は開館)、休日の翌日 (土・日・休日の場合は開館)、第4木曜日、年末年始、特別整理期間



## 市民図書館

仙台市青葉区春日町2-1 (せんだいメディアテーク内)  
電話022-261-1585  
市営バス「メディアテーク前」下車すぐ  
地下鉄南北線「勾当台公園駅」下車 徒歩6分  
地下鉄東西線「大町西公園駅」下車 徒歩13分



## 広瀬図書館

仙台市青葉区下愛子字観音堂5 (広瀬文化センター内)  
電話022-392-8421  
市営バス「愛子駅前」下車 徒歩5分  
J R「愛子駅」下車 徒歩7分



## 宮城野図書館

仙台市宮城野区五輪2-12-70 (宮城野区文化センター内)  
電話022-256-7361  
J R「陸前原ノ町駅」下車すぐ  
市営バス・宮城交通バス「宮城野区役所前」下車すぐ



## 榴岡図書館

仙台市宮城野区榴岡4-1-8 (パルシティ仙台内)  
電話022-295-0880  
地下鉄東西線「宮城野通駅」下車 徒歩3分  
J R「仙台駅」東口から徒歩5分

## 仙台文学館 館内のご案内

### こどもの本の部屋

絵本や児童書などをご覧いただけます。なお、館内にはベビーカー、ベビーマットがあります。



### ひざしの杜

カレー、うどんといった定番メニューに加え、パンメニューとご飯メニューを選べる碗プレートランチ、焼きたてピザ、クロナッツやフォンダンショコラ等のデザート、こだわりのコーヒー等の喫茶メニューも充実しています。



営業時間 10:00から16:00  
TEL 022-219-1341

### こども文学館えほんのひろば



夏休み期間中は、大人から子どもまで楽しめる「こども文学館えほんのひろば」を開催します。



文学館の緑を眺めながら、絵本や児童書を楽しむ「絵本の部屋」



絵本の読み聞かせや、素ばなし、手遊び、紙芝居、ペープサートなどの「お話し」



企画展示室では絵本の原画展を開催



しおりやぶんぶんごまなどをつくることのできる「手作りコーナー」

# 仙台市内の図書館案内

## 若林図書館



仙台市若林区南小泉 1-1-1 (若林区文化センター内)  
 電話 022-282-1175  
 地下鉄東西線「薬師堂駅前」下車 徒歩 15分  
 市営バス「若林区役所前」下車 徒歩 3分  
 市営バス「若林区文化センター入口」下車 徒歩 1分

## 太白図書館



仙台市太白区長町 5-3-2 (たいはくくる内)  
 電話 022-304-2742  
 地下鉄南北線「長町駅」下車 徒歩 1分  
 市営バス「長町駅前」下車すぐ  
 宮城交通バス「長町駅前」下車すぐ  
 JR「長町駅」下車 徒歩 3分

## 泉図書館・子供図書室



仙台市泉区泉中央 1-8-6  
 電話 022-375-6161  
 地下鉄南北線「泉中央駅」下車 徒歩 5分  
 市営バス・宮城交通バス「地下鉄泉中央駅」下車 徒歩 5分  
 市営バス・宮城交通バス「泉警察署前」下車 徒歩 3分

各図書館では乳幼児向けのお話を開催しています。詳しくは各図書館にお問合せ下さい。

## 宮城県図書館



仙台市泉区紫山 1-1-1  
 電話 022-377-8441  
 開館時間 火曜日～土曜日 9:00～19:00  
 日曜日・休日 9:00～17:00  
 休館日 月曜日(休日の場合は開館)、休日の翌日、  
 館内整理日(1月4日)、特別整理期間、年末年始  
 宮城交通バス「宮城県図書館前」下車すぐ

開館時間、休館日等変更になる場合もありますので、ご利用の際は各図書館にお問合せ下さい。

この冊子を発行するにあたり、次の方々にご協力を、また表紙掲載に関し、各出版社にご許可いただきました。まことにありがとうございます。

- 清水真砂子
  - とよたかずひこ
  - 宮川健郎
  - IMSやまねこ屋
  - 絵本おはなし会ばすてる
  - 絵本と木のおもちゃ横田や
  - おてんとさんの会
  - おはなし泉の森
  - お話コcott
  - おはなしの森
  - おはなしぶーさん
  - 語り手たちの会・みやぎ
  - 紙芝居文化の会みやぎ
  - ぐりの会
  - こどものほんのみせポラン
  - 仙台カナキクラブ
  - 仙台手をつなぐ文庫の会
  - 仙台むかし話の会
  - ちいさいにんぎょうげき
  - まるべと
  - てんたん人形劇
  - とびだす絵本
  - とんぴの会
  - 腹話術あおば
  - ふみこばあばのおはなし
  - みやぎ親子
  - 読書をすすめる会
  - みやぎ親子
  - 読書をすすめる会わらべうた
  - 宮城学院女子大学おもちゃ箱サークル
  - 読み聞かせボランティア
  - おはなしやま
  - 読み聞かせボランティア
  - どんぐりころころ
- (順不同 敬称略)

『この本おすすり』「こども文学館えほんのひろば」  
 お話会のみなさん+仙台文学館  
 二〇一七年三月三十一日発行

編集・発行 仙台文学館  
 〒981-0902 仙台市青葉区北根二二七一  
 電話 〇二二二七-一三〇二〇